

# 青年期における対人的疎外感と自己関係づけとの関連

## —原因帰属に焦点をあてて—

宮野麻里絵\*1・伊藤宗親\*2

本研究は、青年期における大学生を対象に、対人的疎外感における自己関係づけと原因帰属との関連について検討した。青年期における大学生が強くもつ傾向にあった悩みは、集団にという対人状況における不安であったという結果が示されている（堀井・小川，1997）。そのため、対人的疎外感をとりあげることによって、青年期の集団との付き合い方や対人関係構築についての特徴を理解する一助となることが考えられた。質問紙調査を行った結果、対人的疎外感を持ちやすい傾向にある人は、自己関係づけの傾向も高いことが示唆された。対人的疎外感を持ちやすい人は、他者の言動に注意が向きやすく、それを自分に関係があることとして、被害的に結びつける傾向があることが考えられた。しかし、原因帰属との関連はみられなかった。これは、原因帰属に調査対象者の様々な人間観や暗黙の理論が影響したことなどが要因として考えられた。

〈キーワード〉 対人的疎外感，自己関係づけ，原因帰属，青年期

### I. 問題と目的

青年期は、生物学的にも心理社会的にもきわめて変化の大きい「揺れ動きの時期」として注目される時期である（森岡，2006）。対人場面の中でも、堀井・小川（1997）の研究では、青年期にある大学生が強くもつ傾向にあった悩みは、集団にという対人状況における不安であったという結果が示されている。また、岡田（1999）は、青年期にある大学生が集団に受容されることに対して強迫的な努力や気遣いをしていることを指摘している。大学生の対人関係の諸問題の中でも、前述の岡田（1999）や堀井・小川（1997）の指摘にもあるように、集団社会への不安や集団から受容されているのか、疎外されるのではないかという「おそれ」（堀井・小川，1996）を扱うことが青年期心性（生田，2000）や青年期の対人関係の特徴を理解する上で、重要であるように思われた。そのような集団への不安や葛藤を包括する概念として、筆者は、社会や周囲の人との関係の中で生じる疎外感である対人的疎外感（杉浦，2000）の研究に着目することとした。

対人的疎外感とは、疎外感の下位概念として定義されている。宮下・小林（1981）は疎外感を「集団生活や社会

生活の中で自分が他者から排除されている、あるいは、他者との間に距離感・異和感を感じ、どうしてもなじめない、溶け込めないという認知的感情」と定義し、Schimek & Meyer（1975）の研究を参考に、3つの概念に下位分類した。1つ目は、対人的関わりの中で生じる孤独感および不信感である、「対人的疎外感」である。2つ目は、自己の人生や社会などに対する悲観的な見方（厭世観）、さまざまな事象に対する関心の欠如（無力感）、強い圧力意識（圧迫感）、さらに自己目的性の空しさ（空虚感）など、主に社会との関わりにおいて顕在化する疎外感である「社会的疎外感」である。3つ目は、肯定的な自己評価が困難で、自己を拒絶する自己嫌悪感である「自己疎外感」である。

ところで、杉浦（2000）は、学校生活のグループにおいて生じる「理解されていない感じ」、「一人ぼちな感じ」、「疎外されている感じ」、「気詰まりな感じ」などの否定的な感情は、宮下・小林（1981）が疎外感として定義したもののうち、「対人的疎外感（対人的関わりの中で生じる孤独感や不信感）」や「圧迫拘束感（社会や周囲の圧力による拘束感）」などと類似していると指摘している。そして、宮下・小林（1981）の疎外感尺度より、対人的疎外感と思われる「孤独感」因子および

\*1 浜松医科大学附属病院精神神経科

\*2 総合情報メディアセンター

Relation to interpersonal alienation and self-reference during adolescence

— focus on causal attribution —

「圧迫拘束感」因子を選び、さらには女子学生へのインタビューをもとに「自分らしさを出せない、自分らしさを理解されていない」ことを表す項目を加え、合計 21 項目の対人的疎外感尺度を作成している。対人的疎外感についての研究は、筆者の知る限り多くはない。そのため、対人的疎外感をもちやすい人とは、どのような傾向を持つ人なのかを調査することによって、対人的疎外感を構成する要素を明らかにできると考えられる。それによって、青年期における集団との付き合い方や対人関係構築についての特質を理解することにもなるであろう。

では、対人的疎外感はどのような傾向を持つ人であると考えられるであろうか。対人的疎外感は、社会や周囲の人との関係性のなかで生じる否定的な感情であるため、周囲の人に興味がなければ生じないと考えられる。また、「疎外されている感じ」など、被害的な側面も見られる。このような被害的な側面は、自己関係づけ（金子，2000）と類似した側面をもつように思われた。自己関係づけは、他者の何でもない行動やしぐさを自分に向けられたものと感じ、自分に関連づけて物事を被害的に判断する傾向であると定義されている（金子，2000）。これらの点において、自己関係づけは、対人的疎外感と関連しているように考えられた。

また、対人的疎外感の「疎外されている」という被害的な側面から、他者や環境などに原因を帰属するという外的帰属をする特性を持っているように考えられる。丹野（2006）は、被害妄想をもつ妄想型統合失調症と妄想性障害の患者は、ネガティブな出来事を外的に帰属させていたと述べている。対人的疎外感をもつような状況もネガティブな出来事であると思われる。よって、対人的疎外感を持ちやすい傾向にあるものは、原因帰属において、他者や環境などに原因を帰属する外的帰属をする特性を持ち合わせていると考えられる。ここで、自己関係づけは、自己に焦点を当てるため、内的帰属をしているように思われ、自己関係づけと外的帰属は、一見相反する概念のように思われよう。しかしながら、ある帰属の判断に到達するまでに、人間が頭の中でどのような認知的作業を行っているかをモデル化している原因帰属の情報処理アプローチに基づけば、原因帰属を決定するまでは 10 段階のアプローチを経ることが示唆されている

（Hastie, 1984）。そのモデル化とは、①まず、ある行動、現象を知覚する→②それに対する内的表象を作り、適当なカテゴリー化を行う→③原因に関する疑問を提起する→④関連情報を収集する→⑤関連する因果スキーマ、その他過去の知識を探索する→⑥現存の情報とスキーマ等を比較する→⑦情報をもっと必要か、または入手可能かを判定する→⑧もしそれ以上の情報が不必要、または入手不可能ならば帰属の判断を下す→⑨帰属の判断の結果は記憶に貯えられ、次の帰属場面において過去の知識として作用する→⑩帰属の結果に基づいて、さまざまな認知的、行動的反応をとるというものである。よって、原因帰属が変化する可能性を含んでいる。ある事態について、自己関係づけをした後に、その原因を外的帰属へ変化することがあると考えられた。以上のことから、対人的疎外感を持ちやすい人は、まず初めに対人的疎外感を喚起させるような他者の言動などを知覚し、自分と被害的に結びつける傾向と、その出来事の原因を考えたときに、他者や環境に原因があるという外的帰属の判断を下す傾向の 2 つの傾向を持ち合わせていることが考えられる。

これらのことから、2 つの仮説を検証することを目的とした。

#### 【仮説 1】

自己関係づけ尺度得点が高い群の方が、自己関係づけ尺度得点の低い群よりも対人的疎外感尺度得点が高いだろう。

#### 【仮説 2】

自己関係づけの原因を外的帰属している群のほうが、内的帰属している群よりも対人的疎外感尺度得点が高いだろう。

## II. 方法

### 1. 対象

Z 大学教育学部の 286 名を調査対象者とした。最終的な有効データは 281 名（男性 102 名、女性 178 名、不明 1 名）であった（平均年齢 20.62 歳；SD=0.70）。

## 2. 手続き

調査時期は2007年10月上旬に無記名個別記入方式の質問紙法を実施した。質問紙は、授業時間の一部を利用して配布し、すべての質問紙は授業時間内に回収した。質問紙の構成は以下のとおりである。

### 1) フェイスシート

年齢、性別について回答を求めた。

### 2) 金子(2000)の自己関係づけ尺度と青柳・細田(1992)の帰属スタイル尺度

自己関係づけ尺度は、金子(2000)が一般青年に見られる被害妄想的な思考を自己関係づけととらえて、青年期心性の観点から検討することを目的として作成された。全12項目からなる。それぞれの質問項目に対して「あてはまらない」から「あてはまる」の5件法で評定を求めた。分析の際には、自己関係づけ尺度12項目について「あてはまらない」を1点、「あてはまる」を5点とし、得点化した。自己関係づけそれぞれの項目に対しての原因帰属の測定は、青柳・細田(1992)の帰属スタイル尺度を使用した。本研究では、原因帰属が外的帰属なのか、内的帰属なのかを測定することが目的であるため、既存の尺度の一部を筆者が改変して使用した。具体的には、自己関係づけ尺度それぞれの項目に関して、「このように感じた理由について伺います。①あなたがそのように感じた最大の理由は何でしょうか？(自由記述)」と記載した。次に、「②この理由はあなた自身の要因に関係している理由でしょうか。それとも、環境や友達の性格など外部の要因に関係している理由でしょうか。どちらかに○をつけて下さい」とし、2件法(A. 外部の要因に関係している・B. 私自身の要因に関係している)にて、どちらかを選択するように教示した。分析の際には、12項目に対してAを1点、Bを0点として得点化した。

### 3) 杉浦(2000)の対人的疎外感尺度

21項目について「あてはまる」から「あてはまらない」の5段階で評定を求めた。分析の際に、「あてはまらない」を1点、「あてはまる」を5点とし、得点化した。

## III. 結果

本研究の結果におけるすべての統計処理は、統計処理

ソフト SPSS11.5J for windows を使用して行った。

### 1) 各尺度について

自己関係づけ尺度12項目を単純加算し、自己関係づけ尺度得点とした。平均点は、32.48点(SD=9.42) <得点可能範囲; 12~60点>であった。今後の分析に使用するため、自己関係づけ尺度得点における調査対象者の群分けを行った。平均値(M=32.48)を基準として、2群に分け、自己関係づけ尺度低群・高群と命名した。低群は、全調査対象者のうち、126名が該当し、平均値は24.40(SD=5.83)であった。高群は、全調査対象者のうち、145名が該当し、平均値は39.50(SD=5.47)であった(Table 1)。

Table 1 自己関係づけ尺度の群分け

	N	M	SD
低群	126	24.40	5.83
高群	145	39.50	5.47

対人的疎外感尺度21項目を単純加算し、対人的疎外感尺度得点とした。平均は、47.7点(SD=14.1)であった。

自己関係づけ尺度12項目についての原因帰属を単純加算し、原因帰属得点とした。平均は、3.6点(SD=3.2) <得点範囲; 0~12点>であった。これは、新名(1984)が日本の学生は出来事が重要であるほど、正・負どちらの出来事に対しても内的、永続的、全体的な原因帰属(抑うつ的帰属様式)を示すことを指摘していることから、同様の結果が示されたと言える。主な内訳は、0点; 60人、1点~5点; 139人、6点; 27人、7点~12点; 48人であった。

### 2) 対人的疎外感と自己関係づけの関連について

独立変数を自己関係づけ低群・高群、従属変数を対人的疎外感尺度として、一要因の分散分析を行った。自己関係づけ尺度低群124名の対人的疎外感尺度得点の平均値は43.27(SD=12.93)であり、自己関係づけ尺度高群142名の平均値は51.24(SD=14.32)であった(Table 2)。

分散分析を行った結果、自己関係づけ高群のほうが自己関係づけ低群よりも有意に対人的疎外感尺度得点が高かった( $F(1, 265) = 22.41, p < .001$ )。

Table 2 自己関係づけ尺度低群・高群における対人的疎外感尺度得点の平均値と標準偏差

	N	M	SD
自己関係づけ尺度低群	124	43.27	12.93
自己関係づけ尺度高群	142	51.24	14.32

### 3) 自己関係づけ尺度高群における原因帰属と対人的疎外感との関連

自己関係づけ尺度高群において、原因帰属を独立変数、対人的疎外感尺度得点を従属変数として一要因の分散分析を行った。本研究において、原因帰属を内的帰属していた人が多くみられた(0点~5点; 199人, 6点; 27人, 7点~12点; 48人,  $M=3.6$ )。そのため、内的帰属と外的帰属の比較において、人数をできるだけ同数にするためとより明確に内的帰属と外的帰属を比較するために、原因帰属得点が0点だった者を内的帰属群、7~12点だった者を外的帰属群として分析を行った。内訳は、内的帰属群28名、外的帰属群25名であった。内的帰属群の対人的疎外感尺度得点の平均点は52.07 ( $SD=15.54$ )、外的帰属群は、平均点49.60 ( $SD=14.98$ )であった (Table 3)。

Table 3 自己関係づけ尺度高群における原因帰属の群分けと対人的疎外感尺度の平均点と標準偏差

	N	M	SD
内的帰属群	28	52.07	15.54
外的帰属群	25	49.6	14.98

一要因の分散分析を行った結果、内的帰属群と外的帰属群との間に対人的疎外感尺度得点における有意な差はみられなかった ( $F(1, 51) = .346, n.s.$ )。

### 4) 自己関係づけ尺度低群における原因帰属と対人的疎外感との関連

前項において、自己関係づけ尺度高群における内的帰属群と外的帰属群との間に対人的疎外感尺度得点の有意な差はみられなかった。そのため、自己関係づけ尺度低群においても、内的帰属群と外的帰属群との間に有意な差はないことが予想されたが、補足的に原因帰属が影響を及ぼしていないかを確かめる必要があると思われた。そこで、自己関係づけ尺度低群において、原因帰属

を独立変数、対人的疎外感尺度得点を従属変数として一要因の分散分析を行った。内訳は、内的帰属群31名、外的帰属群19名であった。内的帰属群の対人的疎外感尺度の平均点は40.84 ( $SD=10.79$ )であり、外的帰属群の平均点は40.53 ( $SD=15.47$ )であった (Table 4)。

Table 4 自己関係づけ尺度低群における原因帰属の群分けと対人的疎外感尺度の平均点と標準偏差

	N	M	SD
内的帰属群	31	40.84	10.79
外的帰属群	19	40.53	15.47

その結果、内的帰属群と外的帰属群の間に対人的疎外感尺度得点における有意な差はみられなかった ( $F(1, 48) = .007, n.s.$ )。

## IV. 考察

### 1) 対人的疎外感と自己関係づけの関連について

自己関係づけ高群のほうが自己関係づけ低群よりも有意に対人的疎外感尺度得点が高いという結果が示された。そのため、本研究の仮説1は支持された。対人的疎外感の傾向が高い人は、自己関係づけの傾向が高いことが考えられる。この結果から、対人的疎外感を持ちやすい人は、自分とは無関係かもしれない出来事や他者のなんでもないしぐさを、自分と被害的に結びつける傾向があるということが示唆された。対人的疎外感を構成する要因として、自己関係づけが存在するとも考えられる。

### 2) 自己関係づけ尺度高群における原因帰属と対人的疎外感との関連

内的帰属群と外的帰属群の間に対人的疎外感尺度得点における有意な差はみられないという結果が得られた。よって、本研究において、自己関係づけの原因を外的帰属している群のほうが、内的帰属している群よりも対人的疎外感尺度得点が高いだろうという仮説2は支持されなかった。つまり、対人的疎外感を持ちやすい人は、対人的疎外感を喚起させるような他者の言動などを知覚し、自分と被害的に結びつけるという傾向は前項において示唆されたが、その出来事の原因を考えたときに、他者や環境に原因があるという外的帰属の判断を下す

傾向は示唆されなかった。そのため、対人的疎外感を持ちやすい傾向にある人は、この2つの傾向を持ち合わせているわけではないことが示された。

これは、質問紙という調査方法では、Hastie (1984) の帰属のプロセス・モデルという情報処理的アプローチを捉えきれなかったことが要因として挙げられる。それに加えて、自己関係づけというネガティブな状況においての帰属スタイルという限定的な場面を使用することによって、他の要因を排除することを目的としていたが、外山 (2000) が指摘するように、調査対象者の人間観や世界観や暗黙の理論が影響し、「出来事→帰属様式」の図式のような結果が得られなかったことも考えられる。それゆえに、自己関係づけの原因を外的帰属している群のほうが、内的帰属している群よりも対人的疎外感尺度得点が高いだろうという仮説2は支持されなかったと考えられる。また、自己関係づけを行う傾向が低い者にも、内的帰属群と外的帰属群との間に対人的疎外感尺度得点における有意な差はみられなかったため、対人的疎外感には、原因帰属のスタイルにおける影響がみられないことが示された。

## V. 今後の課題

本研究では、仮説2を設定するにあたり、時系列的なモデルを描いていたが、質問紙では十分にとらえきれなかった可能性がある。このことから、今後は、実験場面などを用いて、時系列的な対人的疎外感をとらえ、自己関係づけと原因帰属との関連を捉える必要があるだろう。また、本研究においては、自己関係づけの性質に注目し、自己関係づけ尺度を独立変数に対人的疎外感尺度得点を従属変数として扱ったが、対人的疎外感を感じるために自己関係づけが高まるということもあり得ることである。今後、両者の因果関係の解明が重要になってくると思われる。

本研究では、対人的疎外感を持ちやすい傾向にある人は、自己関係づけの傾向も高いことが示唆された。しかし、金子 (2000) が述べているように、他者に敏感であることは、気配りができたり、他者の立場に立つことができたりするとも考えられ、必ずしも不適応指標となる

わけではないと思われる。このような適応的な面も忘れることなく、今後の対人的疎外感の研究を進めていくことが望まれるだろう。

## 【文献】

- 1)青柳肇・細田一秋 1992 学習無力感に関する研究—その8 解決不可能課題遂行後の快・不快刺激の提示が後続の課題遂行に及ぼす効果— 早稲田大学人間科学研究, 1, 65-70.
- 2)Hastie, R. 1984 Causes and effects of causal attribution. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 44-56.
- 3)堀井俊章・小川捷之 1996 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報, 20, 55-65.
- 4)堀井俊章・小川捷之 1997 青年期における対人不安意識の発達的变化 心理臨床学研究, 14, 448-455.
- 5)生田孝 2000 青年期心性の臨床—精神病理学の視点から— 金剛出版
- 6)金子一史 2000 青年期心性としての自己関係づけ 教育心理学研究, 48, 473-480.
- 7)宮下一博・小林利伸 1981 青年期における「疎外感」の発達と適応の関係 教育心理学研究, 29, 297-305.
- 8)森岡正芳 2006 思春期・青年期の意味 伊藤美奈子 (編) 朝倉心理学講座 16 思春期・青年期臨床心理学 朝倉書店 Pp. 1-41.
- 9)岡田努 1999 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究, 47, 432-439.
- 10)Schimek, J. G. & Meyer, R. M. 1975 Dimensions of alienation and pathology. *Psychological Reports*, 37, 727-732.
- 11)新名理恵 1984 ASQ日本版による大学生の原因帰属スタイルの検討 日本心理学会第48回発表論文集, 619.
- 12)杉浦健 2000 2つの親和動機と対人的疎外感との関係—その発達的变化— 教育心理学研究, 48, 352-360.
- 13)丹野義彦 2006 妄想の心理学的メカニズム こころの科学, 126, 14-17.
- 14)外山みどり 2000 帰属理論から見たパーソナリティ 詫摩武俊 (編) シリーズ・人間と性格 第4巻 ブレーン出版 Pp. 197-209.